《実践報告》

「さわる絵本」に関するイタリア調査
～レッジョ・エミリア市の２施設視察から～

古屋祥子[*1]

キーワード：さわる絵本、イタリア、触覚教育

要旨

本稿では、ヨーロッパの「さわる絵本」に関わる動向調査の一環として、イタリアのレッジョ・エミリア市にある２つの図書館の調査結果を報告する。今回出会った「さわる絵本」の数々は、触覚と視覚のどちらからでも楽しむことができ、視覚に障害のある人もない人も同じ一冊を共有できるインクルーシブな読書体験実現への工夫があった。改めて「さわる絵本」には、様々なバリアを超えるコミュニケーション媒体として大きな可能性があることがわかった。また、「さわる絵本」に関連した様々な取り組み内容も大変興味深く、今後の絵本制作や制作を通したコミュニケーションのあり方を考える契機となった。

はじめに

絵本は、識字能力を獲得する前段階の乳幼児期からふれる文化財である。言葉や視覚効果などの多方面からもたらされる乳幼児や児童への効用が多く実証されている。絵本には多くの種類が存在し、言語や社会習慣など、様々なバリアを越えた理解を促す力も兼ね備えたメディアである。加えて、さわり心地の違った異素材を組み合わせて活用する「さわる絵本」の存在は、視覚に障害をもつ子どもにはもちろんのこと、小さな子どもにとっても、手や指を積極的に用いて五感を刺激する教材としても注目される。しかし、日本における「さわる絵本」の認知度はあまり高くないのが実情である。日本に比べ、フランスやイタリアなどヨーロッパではこの制作が盛んで、国際コンペティションも実施されるなどして、興味深い作品が多く発表されている。

１，研究目的と用語の定義

本稿では、ヨーロッパのさわる絵本に関わる動向の調査の一環として、子どもの芸術教育において先駆的な実践を続けているイタリアのレッジョ・エミリア市での取り組みに着目し、その内容を明らかにすることを目的とする。

『絵本の事典』（朝倉書店，2011）では「さわる絵本」を次のように解説している。

「手で見る絵本、指で読む絵本などともいわれる。触素材を貼り付けて絵を構成したものや、点図や立体コピーで絵を描くものなどがある。多くの場合、視覚障害のある幼い子どもたちが対象である。さわる絵本の中に布の絵本や点字付き絵本も加える分類のしかたもある。布の絵本と区別する場合は、布の絵本は台紙や主素材が布であり、パーツが取り外せたり、手指操作ができるようになっている作品が多い。また、触素材に、においをつけたにおう絵本やさわると音が出るように工夫した絵

（所　属）
＊１山梨県立大学

本もある。近年商業出版されている絵本、特に幼い子どもたちのための絵本の中に、一部の絵がさわって楽しめるようになっている絵本があり、それらもさわる絵本とよばれている。内容によってはユニバーサルデザイン性があり、広く障害のある子どもたちも楽しめる。障害のある子どもたちのために特別に作られるさわる絵本のほとんどは、ボランティアによる手作りである。」

このように分類が難しく、布絵本や赤ちゃん絵本と混同されることもあるため、本稿では「さわる絵本」を「さまざまな素材を使ったさわることのできる絵本」「布や紙、フェルトなどさまざまな触感の素材を貼り付けて絵を構成したもので、視覚に障害がある人もない人もさわって楽しめる絵本」と定義し、手作り絵本も出版絵本も含むものとする。

2，研究方法

イタリアのレッジョ・エミリア市にある２つの教育施設を訪問し、「さわる絵本」に関する取り組みの活動実態等を調査する。

（１）調査対象と訪問日時

① トゥルケッティー図書館　2023年10月30日14:30-16:00

② 子ども現代アート図書館 Didart ＆市立美術館　2023年10月31日14:30-16:00

（２）調査方法：訪問調査、通訳を介してのインタビュー調査、文献調査、インターネットによる公開情報調査

3，調査結果

（1）トゥルケッティー図書館　（ガリバルディ地域盲人協会施設内）

Biblioteca “G.Turchetti” (Istituto Regionale Giuseppe Garibaldi per i Ciechi)

レッジョ・エミリア市の北西部にあるＧ．ガリバルディ地域盲人協会は、視覚障害のある児童および青少年の教育と社会への統合を促進するために 1883 年から活動している教育機関である。17世紀にパリで初めての盲学校ができ、その後ヨーロッパ全域に視覚障害者のための学校が設置されるようになるが、このレッジョ・エミリアの施設もイタリア全土から子どもが集まる視覚障害者のための施設となり、敷地内に寄宿舎や教会もあった。1920年代ごろまで様々な教育が試行錯誤されたが、本施設は男女共学を実現するなど先進的であった。また、当時は視覚障害をひとくくりにした教育が一般的であったが、全盲と弱視をわける教育の視点が取り入れられるようになった。1976年の法律改正で盲学校はなくなるが、本施設は閉校せず、教育者の支援を行う施設となった。ソステーニョという支援教員のための２年間の研修コース実施や、大学との協働で研修を行うようになり、2000年には子どもと家族のためのコース運営と、０歳から18歳までの子どもが通うスタイルとなった。現在は子どものための運動療法や音楽療法、情報教育が行われるほか、学校と連携したワークショップやキャンプの実施、親サポートなど様々な活動が行われている。



写真１　ガリバルディ地域盲人協会施設入口

所属機関であるトゥルケッティー図書館は、視覚障害者のための資料提供と文化活動を行う専門図書

館として2000年に施設の地下室に整備された。図書館には専門書、業界雑誌、児童向け小説などが収蔵されており、研究所の利用者と職員（視覚障害の有無にかかわらず）にとって貴重な参考資料となっているほか、点字本やさわる本、オーディオブックなどさまざまな読書障害に特化したセクションも設けられている。

当館の管理者であり、教育スタッフ、イベント・プロジェクト担当者でもある Paola Terranova 氏（以後テッラノーヴァ氏）に、さわる絵本に関するインタビューを行った。さわる絵本と視覚障害児の関わり方について以下のように解説された。

・リボンが冒険する話の赤ちゃん用のさわる絵本を紹介しながら

まず、おしゃぶりや歯ブラシなどの身の回りにあるものを使って、それがくっついている、とれないものだということを理解することから始める。主人公のリボンがポケットから出てきたり、穴をくぐったりする動作を通じて、視覚に障害のある子どもに必要な空間認知能力が養われる（写真５）。

・布団の素材を探る話のさわる絵本を紹介しながら



写真２　図書館のある建物



写真３　図書館内に専門書が並ぶ様子



写真４　さわる絵本コーナー

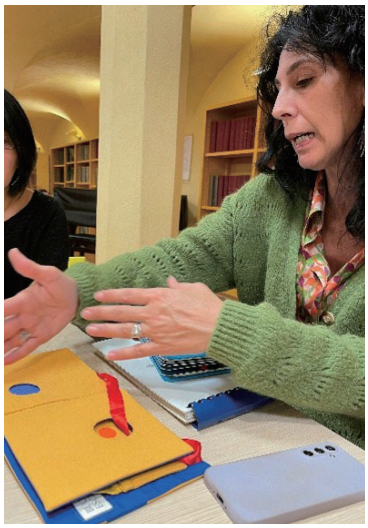

写真５　赤ちゃん用さわる
絵本の解説をするテッラノーヴァ氏



写真６　布団の素材を探る
ストーリーのさわる絵本

「やわらかい」や「すべすべしている」などの言葉の意味を視覚に障害のある子に教えるのは難しいが、このような本があってさわりながらこうだねと共有しながら教えることができる（写真６）。

さわる絵本は大きさが重要である。大きすぎると子どものやる気がなくなってしまう。また、弱視の子どもには、色のコントラストがあるものが見やすい。

・ミラノ盲人協会が発行している『ざらざらくん』を紹介しながら

真空成型でレリーフ状にしたプラスチック板をベースに様々な素材が貼り付けられているが、地面があることがわかりやすいこと、地面に接地せず、宙に浮いている表現はわかりにくくなる（写真７）。

・イモムシの体が様々な素材で出来上がっていくという話の絵本を紹介しながら

目でも手でも楽しめる例で、文字と絵がリンクして素材別に認識できる。インタラクティブで楽しく遊べて、視覚に障害のある子も一緒に読むことができる（写真８）。

また、ページがめくりにくい子ども用のサポートとして、本のエッジが斜めにカットされた本や、さわり心地を当てる神経衰弱ゲームも紹介された。遊びながら触覚の感度を磨き、コミュニケーションが取れることが解説された（写真９）。

その他、イタリア全国視覚障害者支援連盟の「ほらあな」という袋に手を突っ込んで、中に隠れているものを手で感じる絵本や、「影」というさわれないものを理解することができる優れた本、「ポケットにある空」という音や気象に焦点を当てた作品などが紹介された。さわる絵本はただ素材を使えば良いというものではなく、しっかり説明ができるかどうかが重要であることを学んだ。

また、ワークショップに使う紙や布などの素材、ノリやハサミなどの道具が並べられたコーナーがあった。様々な色やさわり心地の違うものが用意されており、市内にあるレミダ（クリエイティブ・リサイクリングセンター。端材や廃材を集積した大規模な素材倉庫。）からの素材なのかを質問したところ、そうではなく買ったものが多いという答えだった。



写真７　『ざらざらくん』シリーズ



写真８　イモムシの絵本



写真９　さわり心地を探るゲームの紹介



写真10　ワークショップ用の素材が並べられた机

（2）子ども現代アート図書館ディダルテ（レッジョ・エミリア市立美術館内）Didart（Musei Civici di Reggio Emilia）

レッジョ・エミリア市の中心部に位置する市立のミュージアムは、自然史・考古学・美術・歴史・精神医学など多分野にわたるコレクションを擁している。パラッツォ・デイ・ムゼイ３階には、現代美術教育のための資料センターであり、児童・青少年向けの国際的な美術出版物を専門とする図書館でもある「ディダルテ」がオープンしている。ディダルテにはアーティストやイラストレーターによる3,000冊以上の出版物が所蔵されており、ワークショップスペースも完備されている。図書館が併設されたミュージアムは稀であるが、2004年に EU ヨーロッパプロジェクトの一環で作られ、ミュージアムと本の連携性や対話が重要視されている。博物館に近づくための図書館であるので、アートや自然に関係する本がセレクションされている。

教育プロジェクト責任者の Chiara Pelliciari 氏（以後ペッリチャーリ氏）に、本図書館と所蔵図書の特徴についてインタビューを行った。

ペッリチャーリ氏は数十冊の絵本を机の上に用意して解説してくれたが、その概要は下の通りであった。

・ブルーノ・ムナーリの本について

手で読む本や透明な紙にプリントされた絵をレイヤー上に重ねてストーリーを作る絵本、アルファベットの形にスポンジシートをカットした絵本、子どもとの会話から生まれたフォークの絵本などが紹介され、本である前にモノとして存在する意識や、本のフォルムに対する考え方などが共有された（写真14）。

・紙が主役の本について

紙のさわり心地が楽しめる例として駒形克己の本などが紹介され、一方でさわって楽しむために作られたとしながらも、目の見えない人を想定していない例も紹介された。

・アーティストを扱った本

マティスを例に、アーティストへの理解を深める絵本が数冊紹介され、様々な描かれ方があることが紹介された。小さなめくるページが付いた遊びが入った子どもに人気の本や、ポンピドーセンターが制作した詩的な文に作品をばらして紹介する本などがあった（写真15）。

・様々な形式の本

蛇腹製本やポップアップ絵本など、表現形式が様々である



写真11　レッジョ・エミリア市立博物館入口

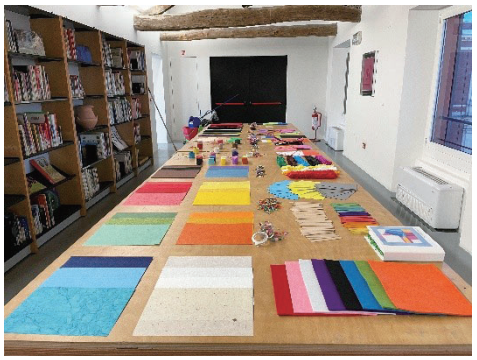

写真12　ワークショップ用の素材が並ぶディドゥアートの様子



写真 13　蔵書



写真14
ムナーリの作品を紹介するペッリチャーリ氏

ことが示された（写真16）。

・高校生によるさわる絵本作りプロジェクト

コロナ禍に行った長期プログラムで、４人のグループで制作された手作り作品９点が紹介された。アート作品や絵本を目の見えない人へ伝えるための触察絵本を制作することは、障害者への配慮について深く考えるきっかけになったことや、絵本が様々な人の参加の潤滑油となったことが説明された（写真17）。

・レッジョ・ナラでのワークショップ

高校生とペッリチャーリ氏で実施した「暗闇の中で読むストーリー」というワークショップの内容と成果物が紹介され（写真18）、さわりながらストーリーが想像できることから、視覚障害者の立場を疑似体験し、他者に近づく教育効果があることがわかった。

・自然をテーマにした本について

ワークショップルームの一角に本や自然物の展示コーナーがあり（写真19）、100の言葉をうたう街なので、いろいろな解釈の提案を心掛けている。

レッジョ・エミリア市立美術館が学校や家族向けに展開する教育プログラムにおいて、絵本はワークショップの実施、人間関係の構築、対話、そして新しい、思いがけない視点の開拓のための重要な媒体となっている。

ディダルテでは、テーマ別の展覧会、イラストレーターや作家の招聘、研修コースの開催なども行っており、子どもたちだけでなく、教師、教育関係者、保護者にも、児童文学、教育、博物館教育に関するテーマを探求できる場を提供している。芸術の言語を探求し、想像力を自由に羽ばたかせることができる空間であると感じた。



写真15　アーティスト紹介本の例



写真16　蛇腹本の多様な見方の紹介



写真17　高校生によるさわる絵本



写真19　ワークショップルーム内の自然に関する展示



写真18　レッジョ・ナラでのワークショップの紹介

おわりに

本稿では、イタリアのレッジョ・エミリアにある２つの図書館の調査結果を報告した。今回の調査で出会ったさわる絵本は、単に布を使った布絵本やソフトな素材を使った赤ちゃん絵本とはまた別の、手で触りながら楽しむことができる、様々な素材を組み合わせて作られた絵本であった。触覚と視覚のどちらからでも楽しむことができ、視覚障害のある人・ない人が同じ一冊を共有できるインクルーシブな読書体験が実現できるものが多く、様々なバリアを超えるコミュニケーション媒体として大きな可能性がある。２つの施設訪問は、声、言葉、そしてイメージを通して、感情と物語に浸り、好奇心が刺激され「見ることを学ぶ」機会となり、今後の絵本制作や制作を通したコミュニケーションのあり方を考える契機となった。日本でのさわる絵本の展開を考えるうえで参考にしていきたい。

謝　辞

現地でコーディネートをしていただいた石井希代子氏、テッラノーヴァ氏をご紹介いただいたピエトロ・ベッキアレッリ氏、森泉文美氏、現地通訳の上村かおり氏、石川敏子氏に心より感謝申し上げます。

付　記

本研究は JSPS 科研費23 K 00217の助成を受けたものである。

本稿に使用した写真は全て筆者が2023年に撮影したものである。

主な参考文献・URL

・中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一　監修（2011）『絵本の事典』朝倉書店
・Roberta Bridda（2023）『ABC. I primi passi per la realizzazione di un libro tattile illustrato』Start Edizioni
・Istituto Regionale Giuseppe Garibaldi per i Ciechi HP　https://www.istitutociechigaribaldi.it/（最終閲覧2025年10月15日）
・Musei Civici di Reggio Emilia HP https://www.musei.re.it（最終閲覧2025年10月15日）
・Federazione Nazionale delle Istituzioni Pro Ciechi Onlus HP（イタリア全国視覚障害者支援施設連盟）https://libritattili.prociechi.it/（最終閲覧2025年９月１日）
・Typhlo & Tactus HP　https://tactus.org/?lang=en（最終閲覧2025年９月１日）
・Les Doigts Qui Rêvent HP　https://ldqr.org/（最終閲覧2025年９月１日）

<Report>

Italian Research on "Tactile Picture Books"
― Based on visits to two facilities in Reggio Emilia ―

Shoko Furuya [*1]

Keywords：Tactile Picture Books, Italy, Tactile education